

陳舜臣さんを語る会通信

NO.4 May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月1日

処理しやすかったアヘン戦争、そうは問屋が卸さなかった 太平天国

1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し、次々、推理小説を書いていた陳舜臣さんが、いきなり、私にはそうみえるのですが、本格的な中国歴史物『阿片戦争』を上梓したのは、1967年のことです。中国近代史を眺めると、次は太平天国ということになるのですが、1982年の『太平天国』刊行（講談社）まで、15年を要しています（初出：『小説現代』1979年6月号～82年5月号）。なかなか、「問屋が卸さなかった」のです。

（編集委員 橘 雄三）

《1. 太平天国とは》

清代、1851年、宗教結社上帝会の洪秀全が建てた国。広西省桂平県の金田村で兵を挙げ、53年、南京を陥れ天京（てんけい）と改めて首都とした。キリスト教の影響を受けた一神教（上帝教）を奉じ、土地私有を認めず、天朝田亩制度を公布し、清朝打倒を宣言して、辮髪を禁じ長髪を蓄えた（長髪賊・髮匪）。64年、曾国藩・李鴻章らに滅ぼされたが、中国革命の先駆として後世に影響を与えた。（広辞苑）

《2. なかなか問屋が卸さなかった『太平天国』》

陳舜臣『中国近代の群像』「それからの林則徐」に次のような記述があります。

「小説をかくとき、アヘン戦争は処理しやすく、太平天国はそうは問屋がおろさない。小説『阿片戦

争』をかいて、もう十年近くになるのに、つぎの『太平天国』に手をつけることができない。（中略）1840年から1850年までの十年間は、中国にとっては大変貌の歳月であったのだ。この十年間をよく見据え、よく理解しなければ、太平天国は一行もかけないであろう。」

《3. 登場人物 主役は誰？》

次頁に「太平天国関係年表」をあげました。全員、実在の人物です。「年表」記載の人物のほか、『太平天国』では、架空の人物として、

連維材：海外貿易も行なう廈門の大商人

連理文：連維材の子

西玲：混血の美女、連維材の愛人

李新妹：連理文を慕う天地会系会党の大姐

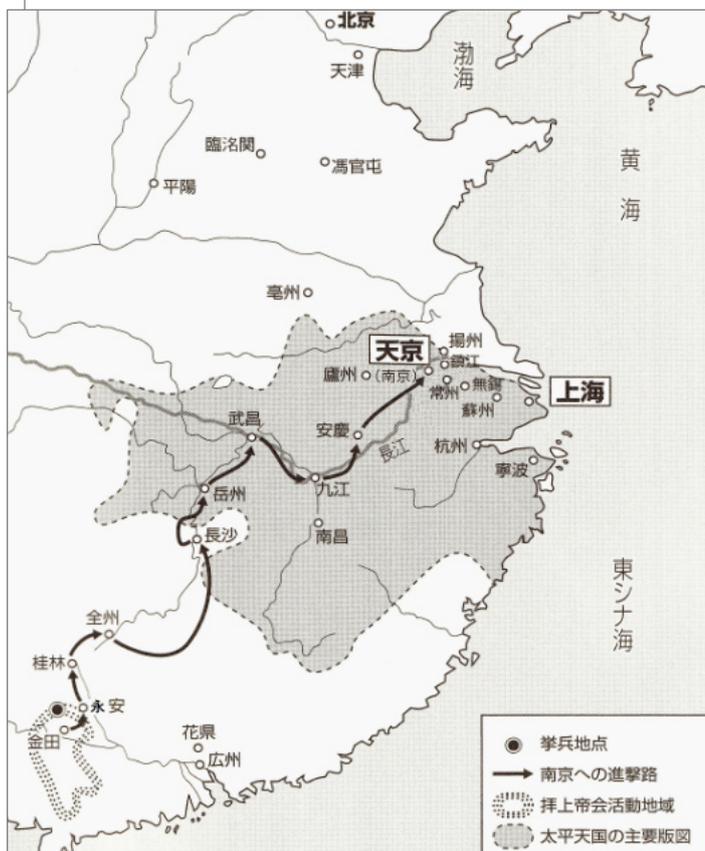
譚七：洪秀全のボディガードで情報マン

らが登場します。しかし、架空の人物はいずれも狂言回しか脇役で、「主役は誰？」と問われると考え込んでしまいます。

陳舜臣著『阿片戦争』（1967年 講談社）の解説で奈良本辰也氏は次のように書いています。

「『阿片戦争』の主役は阿片戦争そのものなのだ。（中略）この作品の場合、どの人物をとりあげても、この小説の主役とは言いがたいのだ。林則徐にして然り。作者が作中もっとも重要な役割をふりあてている連維材という人物も、時代を象徴する英雄としては描かれていないのである。（中略）氏にとって阿片戦争は事件ではない、時代そのものなのだ。」

『太平天国』においても、その他、陳舜臣さんの多くの歴史小説において、まったく同じことが言えます。このことは、陳作品の長所であって、短所でもあります。つまり、陳作品は感情移入しにくく、北方謙三、宮城谷昌光らの中国物を読むときの、手に汗を握り、ぐんぐん引き込まれていくような高揚感はあまり経験できません。無い物ねだりということでしょうか。



太平天国関係年表 及び 太平天国の歴史的意義・評価

《4. 太平天国の歴史的意義・評価》

太平天国はどのように評価されているのか、いろんな角度から見ていきます。

(1) 高校の世界史教科書の記述

山川出版『詳説世界史』では、「太平天国の動乱」と表記されています。太平天国側、清朝側、どちらに立つこともない客観的表現と思いますが…。

(2) 中華人民共和国の評価

①「太平天国起義」と表現。義挙なのです。

②洪秀全のふるさと官禄 埭村に秀全の故居・村塾を復元、村の入り口に「洪秀全故居紀念館」を設立、そしてダムに洪秀全水庫と命名。

③武昌の九女墩（きゅうじょとん）

太平軍に9人の婦人が参軍し、戦死した丘に石碑を立てた。碑面には宋慶齡題、何香凝筆の詩。

(3) 宮崎市定『中国政治論集』（中公文庫 1989年）

「李忠王自伝」（紙と筆を与えられて書いた忠王李秀成の供状）の記述をめぐる中国の学会での議

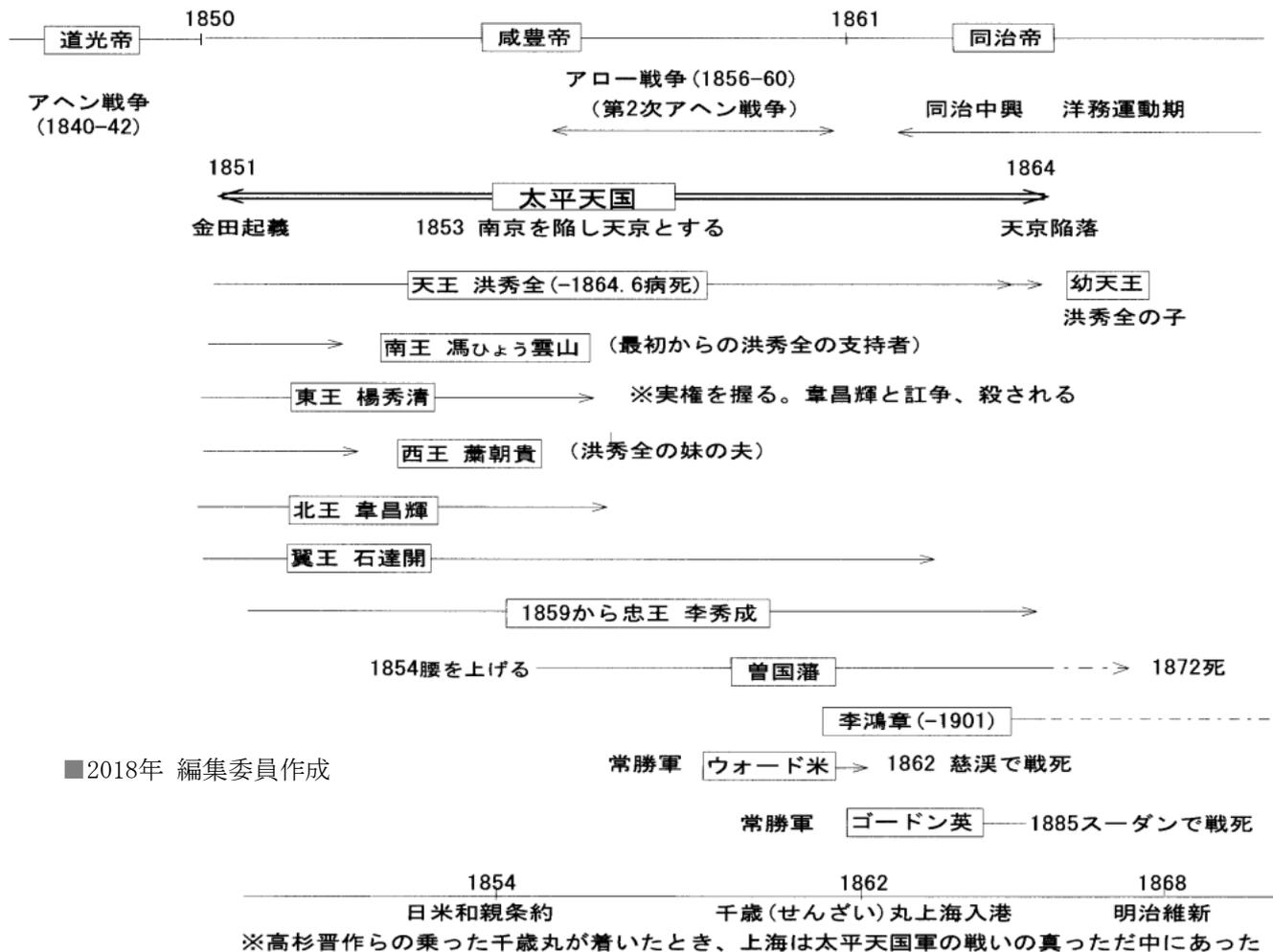


広東省花県官禄埭村入り口
1992年編集委員撮影

論に関連し、宮崎市定氏は、

「彼（李秀成）にはそれが革命運動だというような自覚はなかった。現代の人がそこへ近代的な革命思想を吹きこんで膨らました上で議論しても始まらない。史実に即して見て行っても、太平天国はそんなに価値のある革命運動とは思えない」と記しておられます。

太平天国関係年表



■ 2018年 編集委員作成

陳舜臣さんにとって 強い思い入れがあった太平天国

《5. 陳舜臣さんの太平天国観》

次に、陳舜臣さんの太平天国観を見ていきます。

(1)陳舜臣『中国歴史の旅 下』「南京」の記述
「アヘン戦争のあと各地に反乱が起りましたが、それは人民の生きんがための決起でした。数多い造反軍のなかで最も大きく、そして最もはっきりした革命理念をもって起ちあがったのが、「太平天国」であったのはいうまでもありません」

「南京の山河や残った城壁の一つ一つは太平天国の勇敢な戦いの記念碑にほかなりません」

(2)陳舜臣『太平天国』「九女の岡」の記述
「九女墩（きゅうじょとん）の碑は、いまさんさんたる陽光を浴びる岡にそそり立っている」

※九女墩については、前ページ参照

九女墩の碑
鳳凰網より



(3)『Who is 陳舜臣』(2003年 集英社)「自作の周辺」
「題名を決めるとき、雑誌の担当者の意見は「太平天国の乱」がいいと。そのほうが本にしたときに、売れるというんです。そのとき、私は絶対にだめだと、拒否したんですよ。これは、「乱」ではないと。私にしては、ちょっと厳しく言ったんですよ」

「孫文は、子供のころから洪秀全に憧れていたんです。彼は洪秀全と同じ広東の客家ですから親近感もあったのでしょう。(中略)孫文は、太平天国は辛亥革命にいたる先駆であるとして、不十分な革命であったが、自分たちはその失敗から学ぶべきことが多いと言っています」

(4)陳舜臣『九点煙記』「金田抄」の記述

「清朝は太平天国を鎮圧したあと四十余年で滅亡したことになる。もし太平天国の挙兵がなければ、中国の封建王朝の命脈は、すこしはのびていたにちがいない。共和制中国の誕生を早めた意義ある革命運動が太平天国であり、現在の中国がこれを高く評価しているのはとうぜんであろう」

《6. 陳舜臣『六甲山房記』「桂平まで」より》

この随筆は、陳舜臣さんの、太平天国起義の地、金田村訪問記です。陳さんが広西の桂平県を訪ねたのは、1979年3月のことです。もちろん目的は、『太平天国』執筆にあたっての取材です。鉄道で広西壮族自治区の南寧まで行き、一泊、翌日、桂平まで250キロ、乗用車で桂平県を目指したのです。

途中、「面倒なこと」になります。

「生活のローテーションが変わると、私は下痢しやすい体質のようである。その日も八時に南寧のホテルを出て一時間ほどすると、自分でもこれは面倒なことになるとわかった。(中略)県城には十時ごろに着くという。とてもそれまでもちそうにない。私は恥をしのいで事情を告げ、そのあたりで用を足そうとした。すると運転手が、すぐ近くの村に公衆便所があるから、そこへ行こうと言った。(中略)私は辛抱できるまで辛抱しようと覚悟したのである。公衆便所についたのが、ちょうど九時三十分であった。公衆便所といっても、横に長い掘立小屋のようなもので、(中略)私はそのなかに駆けこんだ。(中略)用を足して、がたぴししている扉をあけて驚いた。公衆便所の前は黒山の人だかりである。子供が多かったが、(中略)村中の子供は、全員あつまったかんじなのだ」

私は、この記述を読んで、一層強く、陳舜臣さんに親近感を持つようになりました。私も陳さんと、まったく同じなのです。

ところで、陳舜臣さんの桂平訪問は、南寧から高級国産車「上海」に乗り、数時間のドライブで、トイレ前の子供たちは、初めて見る立派な乗用車に群がっていたのです。

一方、1992年の私の桂平行きは、広州から珠江、西江、更に潯江を遡る2泊3日の船旅で大変でした。

続けて、「桂平まで」の記述です。

「道路の北側には、桂林の写真でおなじみのあの奇怪な形の山がならんでいる。ならぶというよりは、あちこちに、によっきりと突起している、といったほうがよいだろう」(↓ 1992年、編集委員撮影)



『太平天国』 あらすじ 通し番号は、特に意味はありません

(01) 洪秀全は24歳のとき、広州に出て、2度目の府試に挑戦するも見事に失敗。しかしこのとき、二つの貴重な経験をする。

① たまたま、新進気鋭の儒学者、朱次琦の公開講義で「三世の説」を聞き、稲妻に打たれたように感動する。理想の社会は、聖人周公の時代、つまり、過去にあったと教えられてきたのに、未来にあるのだといわれ仰天する。「三世の説」では、**衰乱の時代から升平**にいたり、さらに**太平**にいたるといふ。

② 広州街頭でプロテスタントの宣教師から『**勸世良言** (かんせいりょうげん)』という本を貰う。

一年後、3度目の受験にも失敗。高熱続き、夢の中で上帝に会う。「妖魔が世人を惑わしているからこれを駆逐せよ」と命じられる。

6年後、『勸世良言』を読んで驚く。本の説くところと夢の中の天父のことが全く同じ…。

(02) 同郷の馮 (ひょう) 雲山と広西省桂平県の紫荆山のふもとの村でキリスト教的結社、**拝上帝会**をつくる。地主や役人と衝突しながら布教を進め、**客家**を中心に多くの信者を得る。

※上帝とはヤハウェ(エホバ、キリスト)を意味する。

(03) 1851. 1、**広西省桂平県金田村**で「**太平天国**」、**旗を掲げる**。洪秀全38歳。(↓ 1992年、編集委員撮影)

(04) 曾国藩、母の喪に服するため帰郷(湘郷)。長沙はすでに、太平天国軍に包囲されていて、陸路を使う。



曾国藩、弟国荃と団練(郷勇)を組織。

(05) 太平天国軍、**武漢三鎮を陥す** (1853. 1)。死者は10万とも数十万とも。**黄鶴楼は炎上** (1985年に再建)。

(06) 「金田村生まれの太平天国は、**永安で骨格をつくったとするなら、武昌では肉をつけた**といえるだろう」。辮髪を切る。献納を徹底させ、私有財産を聖庫へ。能人館(病院)、老人館、童子館、文学館を設置。太平天国曆を制定。

(07) 一ヶ月足らずで武昌放棄。**九女墩**(きゅうじょとん)で太平天国軍に参軍した9人の婦人が戦死。

(08) **南京を陥す** (1853. 3)。「なんととっても天下の副都である。これまでの桂林、長沙、武昌にくらべて、格が違うかんじの城市であった。」

「百姓には指一本ふれるな。官兵、官吏は一人残らず

殺せ」が原則の太平天国軍も「**韃婆**(だつば 満州族夫人)」には容赦しなかった。切り殺す、焼き殺す、溺死させる。縊死するものも多かった。

(09) 洪秀全入城。**南京を天京と称し都とする**。科挙を実施。**天朝田畝制度発布**(実施には至らず)。

(10) 一度は破壊された南京であったが、天王は天王府、東王は東王府とそれぞれに広大な宮殿を造営。後宮をつくり、**貴族化**。首脳のぜいたく競争。**内訌始まる**。



「南京中国近代史遺址博物館」展示の天王府模型

(11) 1853. 10末、**太平天国北伐軍天津に迫る**。しかし、清朝の精鋭部隊と冬将軍に悩まされ**撤退**へ。

(12) 1854. 2 曾国藩、腰を上げる。水軍5千、陸軍5千、**湘軍誕生**。

(13) 1856 万歳の件

楊秀清の武器、「**天父下凡**(てんぷげぼん)」(天父が凡俗世界に降りる。)により、それまで九千歳だった楊秀清が洪秀全と同じ万歳になった。

(14) 1856. 9 **天京事変**

辱めを受けながらもゴマすって耐えていた北王韋昌輝が東王府を襲撃し楊秀清を殺害。北王韋昌輝は東王の残党に捕らえられ、殺される。

⇒ **石達開ブーム**。洪秀全の取り巻き(実兄の仁達、仁発)は、石達開が第二の楊秀清になると進言。石達開は、わずか半年の輔政の後、天京を去る。

このあと、太平天国を支えたのは**忠王李秀成**。但し、忠王府は蘇州に置いた(疑心暗鬼)。

(15) アロー戦争(**第二次アヘン戦争** 1856-60)天津条約、北京条約⇒条約締結後、列強は清朝に味方。

(16) 清朝側の中心は**曾国藩**、遅れて**李鴻章**。そして、ウォード(米人船員62年戦死)、ゴードン(英軍人 ウォード戦死後の**常勝軍**を率いる)。

(17) 1864. 6 **洪秀全 病死? 服毒死?**「安心するがよい。朕はこれから天堂にのぼり、天父天兄から天兵を派遣していただく」

(18) 1864. 7 **天京陥落**(天京事変後、8年も持った)。幼主洪天貴は、忠王李秀成に守られ脱出。李秀成は間もなく捕らわれる。幼主は南昌まで落ちのびるが、砲弾炸裂の中、死亡(64. 10)。